

南山大学社会倫理研究所

2006年度第1回懇話会 ■講師 堀場 明子先生■

講演の概要

2006年4月19日(水)、南山大学名古屋キャンパスN棟3階会議室にて開催された社会倫理研究所2006年度第1回懇話会において、上智大学大学院外国語学科地域研究専攻 博士後期課程3年・堀場明子先生による「インドネシア・アンボンにおけるキリスト教vsムスリムによる宗教紛争—紛争後の現状と平和構築のあり方—」と題する講演が行われた。まず、アンボン市を州都とするマルク州の略歴、1999年1月19日のアンボン騒乱から始まるマルクでの紛争の経緯が説明され、アンボン紛争の幾つかの特徴が指摘される。そして、多数の国内避難民たちの問題を三つのケースに分類した上で、援助不足ゆえに未解決である現状が提示される。さらに、紛争の背景として、アジア経済危機以降インドネシアが混乱期に入っているという国内事情、改革を望まない国軍や中央政府の保守勢力などによる「陰謀説」、潜在的な対立要因を抱えているという地域の事情などが指摘される。また、植民地支配時代に確立された社会構造の根深い影響についても指摘される。さらに、アンボンの伝統的統治システムの衰退により、「アンボン人」としてのアイデンティティが希薄化し、それを補強すべく宗教へと傾倒する、というアイデンティティ形成の事情にも言及される。最後に、当該問題に対する日本固有の役割を果たす上での注意点と長所が述べられる。(文責 | 奥田)

*以下のコンテンツは、懇話会で録音したものを活字化し、講演者本人の校正をへて作成されたものです。無断の転用・転載はお断りいたします。引用、言及等の際には当サイトを典拠として明示下さるようお願いいたします。

インドネシア・アンボンにおけるキリスト教vsムスリムによる宗教紛争—紛争後の現状と平和構築のあり方—

堀場明子 (上智大学大学院外国語学科地域研究専攻・博士後期課程3年)

堀場明子です。いまご紹介がありましたように、インドネシアの東部に位置するマルク州、というのは小さな島々が集まったところですが、今日はその中のアンボン島でムスリムとキリスト教が分かれて住民同士が争った紛争に関して紹介したいと思いま

す。

インドネシア最大の地域紛争と呼ばれるマルク紛争が終わりようやく落ち着きを取り戻しつつあって、いまは復興作業を行っている真っ最中ですが、表向きは平然としていて大分平和になってきた感じですが、ムスリムとキリスト教の間にはいまだにかなり不信感が漂っています。平和構築と開発を考える上で、彼らの関係に細心の注意が必要だと考えています。人々の声を聞かずに平和構築と開発を行うことは紛争の火種を産む可能性を含んでいると考えています。本日は、アンボン島の現状の報告を中心に、調査によって得られた情報を基に日本としてどのような点に注意が必要かということを考えていきたいと思っています。

現在、世界各国で起きている地域紛争、特に民族・宗教紛争といわれるものの1つの例としてインドネシアのマルク紛争を取り上げることができると思います。今回は平和構築の理論とか国際関係といったグローバルな視点から地域を分析するというのではなく、1つの地域を詳しく取り上げることから平和構築、開発への提言をするという方法論をとって話を進めていきたいと思っています。平和構築と開発を効果的に行うためには「地域からの目」がより一層必要だという点を明らかにしたいと思っています。

まず調査地の確認ですが、これがインドネシアです。ここがアチェといって津波があったところです。ここが首都のジャカルタになります。ここがよく観光客が行くバリです。ここが独立した東チモールですが、その北にあたるここがマルク州です。私はこのアンボン島に行って調査を進めています。

これがマルク州を拡大した地図ですが、特にこの辺りが私の調査地となっています。1999年以前はここ一帯すべてがマルク州でしたが、いまは北マルク州とマルク州という2つの州に分かれています。ここを拡大すると、ここがアンボン島になります。ここがハルク島、サパルア島、セラム島というふうになっています。私はこのアンボン島のアンボン市付近のキリスト教の村とムスリムの村に半分ずつホームステイをさせていただいて調査をしてまいりました。

マルク州の概要ですが、マルク州は大小599の島からなる、インドネシア東部に位置する州です。人口120万人を抱えるこの州はキリスト教徒が半数を占め、世界最大のムスリム人口を抱えるインドネシアにしては珍しくキリスト教徒とムスリムのバランスが均衡している州です。

ここは16世紀、特にスパイストレードの中心地として世界中の脚光を集めます。ポルトガル・スペイン・イギリス・オランダと来て、最終的にオランダの支配の要となる地区です。1942年の日本軍の占領まで約350年間オランダの統治下に置かれていました。インドネシア独立にあたり、オランダの影響が特に強かったマルク州は、ジャワ化、イスラム化を恐れ、南マルク共和国というものを宣言して独立運動をしますが、インドネシア国軍に鎮圧されたという歴史を持っています。

これは丁子（英語名クローブ）というスパイスですが、このように道に干してあるの

をよく目にします。ビーチが美しい自然豊かな島です。お米も食べますが、このサゴヤシの中でん粉質を粉状にしたものにお湯をかけて水あめのようにして扱い、食感は葛餅みたいな感じでスープの中に入れて食べます。パプアでも食べられているようですが、こういうものが主食としてあります。豊かな漁場を持っていて新鮮な魚が大量に捕れますし、こういう感じで市場は活気づいています。

このような美しい南に浮かぶ小さな島アンボンで、1999年1月19日、ラマダン明けの祝日（Idd-ul-Fitrの日）に紛争が始まってしまいました。これはICGのレポートによるものですが、死者5千人以上、70万人もの国内避難民が出たとされています。住民同士の激しい戦いは長期化、拡大。インドネシア最大のホリゾンタルな宗教紛争へと発展しました。

ここから簡単に紛争の経緯をたどっていきたいと思います。些細なよく見かける喧嘩から暴動へ発展したのですが、キリスト教がマジョリティーの地区のムスリムがムスリムの地区へ、ムスリムがマジョリティーの地区のキリスト教がキリスト教の地区へという形で、危険を感じた人々が移動して、キリスト教とムスリムに分断していく状況がどんどん生まれてきます。また、教会、モスクという宗教施設の攻撃によって争いが激化していきます。当初は手製の爆弾、火炎瓶などを使って家を焼き、近代的な武器などなく石や刀を使った戦い方で進んでいったようです。

大きな転換としては、北マルク州で800人ものムスリムが殺害されるという出来事から、ジャワ島で「マルクにいる同胞を救え！」とジハードを叫ぶデモがありまして、その後ラスカル・ジハードと呼ばれる聖戦軍がまずは3千人ほど、最終的には1万人に上るイスラム聖戦軍がマルクに送られてきます。それによってかなり状況が変化します。キリスト教は、マルクプロテスタント教会（GPM）や、先ほど言いました南マルク共和国の独立の戦いをしていた時にマルクの人がかかなりオランダに逃げているのですが、オランダにおけるマルクの人々の支援などによってムスリムの攻撃に立ち向かうわけですが、いまは南マルク共和国の独立を支援する人々は、グループ自体が小さくなりほとんどいないとされていますが、ムスリム側にとってはマルクのキリスト教化を企んでいると思われ警戒され、キリスト教徒への攻撃が激化していったといわれています。

警察の武器庫が攻撃されて、そこでかなり近代的な武器が流出します。それによって撃ち合いが増え死者数が増加します。アンボン人の警察と軍がそれぞれの宗教に分かれて戦ってしまったので、軍や警察の中立的な立場で治安を守るという行動はなく紛争が長期化したと考えられています。自分の宗教のほうを重んじて、キリスト教の警察ならキリスト教のほうに、ムスリムの軍隊ならムスリムとして戦うというようになり、とめどない銃撃戦が続くことになってしまいました。子供は9歳ぐらいから油をまき、油がまかれた後、人々が火炎瓶を投げて家を焼く。そういう形で子供も戦争に参加し、女性は教会とモスクで爆弾を作り、避難してきた人たちもリベンジのため紛争に参加する。攻撃されていない村々からも仲間を助けるべくアンボン市へ集まり住民が戦ったということで、暴力の連鎖が止まらずにいたのでした。

2002年、混乱期にあったインドネシア政府ではありましたが、マリノ和平協定締結に導き、主要な人物の逮捕、非常事態宣言解除と散発的な爆弾事件はあるものの治安は徐々に回復していきました。また2004年4月に大きな暴動が発生しますが、それ以後、爆弾事件は起きても大きな衝突はないというのが現在の状況です。

このように4年にも及ぶ住民同士の戦いで、いままで共に住んでいた人たちが分断して生活し始め、美しかった町は荒れ、いまもトラウマに苦しみ、環境は著しく破壊され、現地に行ってみて、紛争ほど無意味なものはないと確信した次第です。

これから少しアンボン島の様子を写真でお見せします。これは破壊された教会です。これはサパルア島イハ村のモスクですが、村もすべて草に覆われていて、以前ここに人が住んでいたのかと疑ってしまうほどで、焼き尽くされたまま放置されている状況です。村人たちはトラウマで恐ろしくて村に戻れない状況で、いまも不便でも安全だということでアンボン島の山の上のほうに住んでいます。

これはアンボン一の見抜き通りですが、廃墟の建物の上のほうに人が住み着いてしまっています。こういう状況でまだ放置されています。これもそうですが、この上に家を建てて住んでしまったりしているので、これをどかしてさらに建て直すというプロセスに至るにはまだ時間がかかりそうです。これはアンボン市の至るところで見かける風景ですが、焼かれたまま、がれきのまま、草木が周りに生えてきたという状況です。これはターミナルの裏ですが、この露天のようなお店が無計画にどんどん出されて、道が狭くなって、ここはバスが通るのですが、かなり不便な状況です。

この海岸沿いがムスリム地区、山沿いがキリスト教地区という形で、はっきり分かれています。私はバイクもバスもいろいろ使うのですが、あとベチャといわれる自転車の前に座って移動するものがありますが、そういうもので移動すると、やはりすぐにここはキリスト教の地区、ムスリムの地区というのがわかります。例えば、ムスリム地区には犬はいませんし、家の外に飾られているシンボルなどを見て、すぐに判断できるのです。ムスリムとキリスト教の地区は完全に分離されている状況です。紛争のつめ跡が建物も道も至るところに残っていて、これらの再建と復興がトラウマを抱えたマルクの人々にとってまずは急務だと感じています。

ここで少し国内避難民の問題を取り上げたいと思います。ケース1、2、3と分けましたが、まず、避難してきた場所にいまも当時のままで住んでいるケース。ケース2が、以前住んでいた場所に戻らずに新しいところに土地を買って家を作って生活しているケース。そして、一度破壊されてしまったのですが元の村に戻ったケース。国内避難民の中でも3つに分けられると思います。

この写真は1のケースにあたりますが、彼らは2000年に攻撃に遭って家をすべて焼かれ、2年間違う場所に避難していて、また焼かれてしまったので現在の場所に移って逃げてきたという状況です。政府からのわずかなお金では新しい土地へ移動することもできなくて、元の村に戻るのも恐怖で無理ということで、どうにもならない状況でずっと

このまま生活を続けています。これは一応トイレですが、衛生状況がいいかといわれると本当に疑問が残るような感じです。

これも別の避難所ですが、彼らは1999年2月、紛争が起きてすぐに家が焼かれてしまって、それ以来7年間ここにずっと住んでいます。ここは、以前はスポーツ選手のための寮みたいところで体育館のような形でしたが、その広い部屋にこのように板を張って、中に1家族ずつ区切って生活をしている状況です。1家族が多いのでひしめき合っただ中で寝ているという状況でした。台所もちろんないので、彼らがこのように自分たちで作って共同で助け合っているという形です。

これはケース2にあたりますが、避難してきた場所を出て、新しい土地で再スタートしようという人たちです。自分たちでこの山を切り開いて、道もないところを山の上まで資材を運んで、トイレを作っている最中でした。電気は軍の施設が近くにあったので引けたのですが、水も山の奥から引いてきて、自分たちの力で作った家です。このお父さんは仕事がないので、お母さんがパン工場で働いていますが、月2,500円程度のお給料なので本当に生活が苦しいということでした。

これもケース2にあたりますが、山を切り開いてここに移住してきました。以前は漁業で生計を立てていたのに今は慣れない山での生活です。マーケットも病院も学校もすべて遠いし、移動するにもかなり交通費がかさみますから、大変な状況です。

これはケース3にあたりますが、自分の村に戻ってきたはいいのですが、すべて破壊されていたので、一から自分たちで家を作り直して生活を始めています。収入源だった香料の取れる木も漁業のための船も漁具もすべて失い途方にくれたスタートだったとのこと。今なお懸命の復興作業が続いています。

インドネシアで国内避難民というと、津波のことでやはりアチェを思い出される方が多いと思いますが、マルク州でもいまだに国内避難民の問題を抱えたままどうしようもなく、政府の援助も滞っているという状況なのです。

ここから少しインドネシアの国内事情とマルク州の地域の状況を説明したいと思います。この紛争の背景、紛争の要因に関する分析になりますが、1998年5月に開発独裁といわれたスハルト政権が崩壊。以後、数々の改革の中でインドネシア中が政治的に混乱していた時期であったことが挙げられます。いわゆるグッドガバナンスという状況が著しく低下、もしくは存在していなかった時期といえるでしょう。

既得権を持っていた一部の人々は改革を望まず、特に国軍改革によっていままでの政治力を保持できない危機感を持った国軍の一部が治安を動揺させることによって国軍の地位の確保を狙って次々に紛争をしかけ、マルクの紛争もその一つだったのではないかという陰謀説がよくいわれていることです。

また民主化の流れの中、地方分権化が推進されましたが、これによって地方政治家の勢力争いが激化したこと。そして選挙を控えていたということもありまして、各地で勢

力争いが転じて紛争になったのだという分析もあります。

この時期、マルクだけでなく、カリマンタン島、スラベシ島での民族・宗教紛争、そして独立を求め、まずは国民投票を訴えた東チモール、アチェ、パプアと、インドネシア中が騒然としていた時期だったことも忘れてはなりません。

地域の事情をみると、潜在的なキリスト教徒とムスリムの対立が歴史的にあったことが挙げられます。経済的側面からキリスト教徒とムスリムの関係をみると、ムスリムであるブギス、ブトン、マカッサル、ジャワといったところからやってきた移民たちが70年代以降急激に増え続け、彼らによってマーケットなど小規模経済を牛耳られていたということが挙げられます。

しかし、アンボンの経済を本当の意味で握っているのは中国人で、経済の格差に関していうのであれば、ムスリムとキリスト教徒の間に大きな開きがあったとは思えません。キリスト教徒のアンボン人もムスリムのアンボン人も失業者問題などで移民たちを歓迎していなかったということはいえると思います。ムスリム移民たちがキリスト教地区に住み、モスクが増え、土地問題が生じたというほうが問題は大きかったといえるでしょう。

政治的側面としては、地方分権化に伴い宗教による票集めが起こり、ムスリムとキリスト教徒の対立が激化してきた時期ともいえます。この点に関しては、選挙のときの民衆の動員と宗教に関しても今後さらに深めてみたいテーマでもあります。

文化的側面に関しての分析は非常に重要だと思います。1979年の法令によってインドネシアの隅々にジャワ式の統治システムを導引しました。これによりアンボンに存在していた伝統的な統治システム——各村に存在するラジャと呼ばれる伝統的リーダーがいましたが、彼らの指導力の低下。また、マルク特有のムスリムとキリスト教の村をつなぐ「ペラ・ガンドン」と呼ばれる儀式がありますが、その衰退。紛争をコントロールする伝統的なシステムが弱体化したという状況がありました。ジャカルタによる統制で、以前からの伝統的なシステムが崩壊し、伝統的なつながりの弱体化で、彼らのアイデンティティーが、アンボン人というのではなく宗教に向けられてきた点が注目に値すると考えています。なお、この伝統的な儀式ペラ・ガンドンに関しては、紛争後見直され復活しつつあります。平和構築への人々の取り組みという点で注目しています。

このように潜在的な対立構造はさまざまな要因が考えられます。火のないところに煙は立たないわけで、単に陰謀説だけで住民が長期にわたって戦ったということは説明できず、また潜在的な対立構造だけで紛争が起こったとも考えられませんし、暴力紛争の要因は複雑であり、タイミングと引き金があって発生するように思います。

ここからちょっと考えてみたいのが、植民地支配からの影響力です。特に負の遺産に関して、宗教紛争そのもののやっかいさについて、現地で得られた情報を基に考えてみたいと思います。

これは世界各国の地域紛争とも共通しますが、アンボンの場合、オランダが香辛料貿易（スパイストレード）の中心地として支配していたため、オランダ人のやりやすいように、キリスト教徒を重宝して役人や軍人に据え教育を与えたのに対し、ムスリムは追いやられて生活していたという歴史です。これを見ていただきたいのですが、ここがアンボン市です。現在もアンボン市を除き大体がムスリム地区とキリスト教地区にはっきり分かれています。「私はヒラ村出身よ」と言うと、みんな「だったらムスリムね」という形で、村の名前を言うと宗教がわかるという状況になっています。ヨーロッパ勢力が進出する前から根づいていたムスリムは多数存在しますが、アンボンにおいては表舞台に立つことはありませんでした。いまでもインドネシア内において、アンボンというと「キリスト教の多い州ね」と言われるほどです。しかし、実のところ人口比は半分半分といったところではあります。

植民地支配が終わり、インドネシアの1つの州になったアンボンは役人も先生もそのほとんどがキリスト教徒で独占されていましたが、時代が変わるにつれ、ムスリムにも教育が行き渡り、以前キリスト教徒が独占していた職にも就くようになってきました。また、先ほども述べたように、ムスリムが88%を占めるムスリム大国インドネシアであるため、移民としてやってくる人々のほとんどがムスリムです。マルク州内のムスリムはもとより、アンボン人以外の移民も70年代以降アンボン市内に急激に増加し、キリスト教のテリトリーに多くのモスクが立ち並ぶことになりました。また、スハルト政権の転換で、90年以降ムスリムを重宝する傾向が生まれ、インドネシア・ムスリム知識人協会（ICMI）と呼ばれる組織を作るんですが、アンボンでもとうとう1992年にムスリムの知事が誕生しました。

これらの変化はキリスト教徒にとってマルク州のイスラム化と映ったに違いありません。植民地時代からの特権が当たり前のこととして存在し、キリスト教徒とは先生であり、役人でなくてはならないという前提が、ムスリムの増加や役職の独占の崩壊をキリスト教徒への脅威と感じさせたのだと思います。また、キリスト教の人々の言葉にムスリムをばかにしたようなトーンが無意識に込められているのも見逃せません。

ムスリムにいたっては、差別されてきた経験が憎しみ、恨みとなって存在し、キリスト教徒は信じられないといった考えを抱いています。ムスリムの人々は小さいときから「キリスト教徒の家でご飯を食べてはいけません」——これは豚肉の関係もありますが、「キリスト教徒とあまり仲良くなり過ぎてはいけません」といったことを家で聞かされて育ってきたといいます。

表向きは仲良くしている彼らでも、過去に行われた差別や不公正が社会に残した不信感には本当に根強いと感じました。宗教にかかわらず能力のある人がリーダーになるといった考え方はそこにはありません。植民地支配は終わったのだということをマルクの人々が自覚し、宗教や民族といったアイデンティティーにとらわれることなく、共通の問題点を探り、共に解決していこうという価値観を共有しなければならないと思います。これはマルクに限ったことではありません。植民地支配のもたらした負の遺産について目に見えない部分をさらに議論しなくてはならないと考えています。

宗教紛争がなぜ長期化し、やっかいであるかという点についても、現地から得られた情報により考えてみたいと思います。

まず紛争当時、危険が迫ったときに宗教施設、つまり教会とモスクが最も頼れる、保護してくれるシェルターとして存在していたようです。紛争前に比べて、それぞれの宗教に対する信頼度が相当高まったことがみられます。紛争によって傷ついた人々は教会とモスクにそれぞれ運ばれ、そこでケアを受け、みんなで死をみとり、嘆きを共に分かち合う苦しみの経験を共有しました。教会とモスクが軍事作戦の司令部であり、そこに人々が集まり作戦を立て、子供も女性も教会で、そしてモスクで爆弾を製造し、食事の世話、掃除、介護の仕事に分かれてそれぞれ働いていたようです。まさにベースキャンプのような場所が宗教施設でした。

そして、紛争による心のケアの場でもあったということです。人を殺すという行為から来る罪悪感を慰め、戦いの意義と正当性を説き、死んでも天国に行けるという思想で勇気を奮い立たせる。これらの紛争のジャスティフィケーション (justification) に宗教が利用された場合、つまりわれらがキリスト、われらがアッラーを守るための戦いであり、この戦いには神のご加護があつて、死んでも天国に行けるのだという聖戦の考え方へ導きます。イデオロギー戦争同様、敵がすべて間違っており、こちらがすべて正しいとなるため、敵に容赦なく残虐になり、自分のアイデンティティーの源である宗教が危険に冒されているとの危機感から、言動は過激になっていったようです。実際、マルクの紛争でも内臓を取り出したり、体を切り刻んだり、焼いた体をさらしたりと、残虐な極まりない行為が見受けられたと聞いています。

世界中の宗教・民族紛争も同じような傾向がみられると思います。紛争の経験でそれぞれの団結力、連帯意識が高まり、キリスト教徒、ムスリムをこの島から追い出すまで戦うと言っていたようで、紛争当時暴力の連鎖を断ちきることは相当困難であったと考えられます。本来ならば、宗教が平和を説き、宗教こそが紛争を止めるために努力すべきですが、その宗教が主役となって戦いを悪化させているというところが最もやっかいになります。ジャスティフィケーション (justification) に宗教が使われたときの勢いはこれほどまでにすさまじいのかと改めて考えさせられた調査でした。

これらのことから日本人としてより一層研究しなければならないのは、植民地支配によって同じ地区を二分するような経験や差別を受けたことがない日本は、この根強く残る構造についてもっと敏感にならなければならないというのが1つ。もう1つは、宗教感覚が欠如している現代の日本人は、もっと宗教について知り、彼らの宗教を尊重しながら接し、宗教そのものに対してセンシティブにならなければならないという2点です。日本は経済的格差や貧困を紛争要因として分析するのは得意ですが、歴史的背景とそこに存在する差別や不公平、また宗教感覚といったことについてよりセンシティブにならなくては平和構築並びに開発を担うとき問題が生じると思います。

最後に、紛争分析と平和構築、開発について少し気づいた点を挙げておきたいと思います。平和構築とは、日本において援助支援の重要なテーマの1つです。ピースメーキ

ング (peace making)、ピースキーピング (peace keeping) に引き続き行われるステージとしてピースビルディング (peace building)、すなわち平和構築があり、紛争が終了した後の持続的開発とのかかわりの中で考えられています。そこで、平和構築、開発を担う上で大切なのはプロジェクトの優先順位のつけ方であると考えます。開発を考える日本のようなドナー側はかなり慎重に行わなければならないということです。なぜなら、開発の優先順位と場所の選定を間違えると、ねたみを買って再び紛争になりかねないからです。平和構築と開発を考えると、先ほど述べたような日本人に欠けている点に注意しながら、両方の住民と紛争分析を行った上で対策を立てなければ、外国人である日本人が復興モデルというようなものを持ってきていきなりプロジェクトを行うと、宗教紛争の後のような場所では紛争再発の恐れがあるということを肝に銘じなければなりません。

ここでマルク紛争の例を少し見てみたいと思います。

先ほどの地図ですが、Passo村というのがここに 있습니다。これはアンボン市から少し離れたキリスト教徒が多く住む地区です。紛争中多くのキリスト教徒が避難民としてPassoに逃げてきました。そこにはアンボン市に次ぐ大きなマーケットができ、Passoを中心に付近のキリスト教の村では道沿いにスーパーマーケットやホテルが建ち始めて復興が進んでいます。また、近々バスターミナルをこのPassoに作ろうという計画があります。

この開発自体は決して悪いことではありません。しかし、Passo村は地理的關係上アンボン市へ向かう唯一の道です。といいますのも、この辺はみんなムスリムなのですが、彼らがアンボンに行くにはこの道を通らないと行けません。ムスリムの人は必ずPasso村を通ってからでないとアンボン市には行けません。ムスリムのほとんどが、その道で開発が進んでいるのを目の当たりにしてアンボン市に入ると、いまだがれきの中で生活する同胞ムスリムが数多く存在し、先ほど見せた写真の目抜き通りですら建物が紛争当時のまま残されているのに、どうしてPasso地区だけ？となっているようです。またバスターミナルができると、北のほうに住む人たちはそこでいったんバスを乗りかえてアンボンに行くということになるので不便になるばかりか、キリスト教の村だけ栄えるという感覚に襲われます。

政治的に考えられてここだけ開発が目立っているというわけではありませんし、きっとたまたまお金持ち、ほとんどが中国人ですが、スーパーを建てたのであり、政府の開発事業とは関係がないのかもしれない。しかし、宗教紛争後の非常にセンシティブな状態である人々にとってキリスト教の村だけがとなっているわけです。人々の声を敏感にキャッチし、公正さを前面に出した開発でなければ、もしくは開発に関する住民説明をきちんとし理解を求めるなど対策を講じないと問題が発生するということです。ある村の村長が「もしPasso村だけ開発を進めるなら、また攻めてやる」と言っていました。平和構築の名による開発が紛争を産む可能性を感じた瞬間でした。

また、紛争分析の大切さを思い知った例を挙げてみます。

パティムラ大学という国立大学がここにあります。紛争中すべてが灰となってしまうました。既に新しい校舎ができて学生も戻って活気を取り戻しつつあります。もう攻撃を受けないためにはどういった平和構築、開発のプランが必要なのでしょうか。国立のパティムラ大学がどうして攻撃されたのか分析をする必要があります。

ここに大学がありますが、この一帯とここのムスリムの人たちを合わせて18の村がそろって攻撃して、大学が焼き尽くされてしまったみたいです。パティムラ大学は歴史的に植民地時代からキリスト教徒が教育を受けてきたため、その80%はキリスト教徒であり、国立大学ではありますが、キリスト教徒が独占していた大学という印象がありました。ですから、ムスリムがキリスト教関係の建物をすべて壊していた紛争当時、この大学もターゲットにあったようです。

しかも戦略的にみて、地理的条件上も重要な場所です。アンボン市のそばに1つムスリムの村があるのですが、キリスト教の村に囲まれたこの村を助けるためにはこの海の道を通らないと助けられないので、戦略的にもここを取っておく必要性があったということです。経済的にみても、大学のあった場所はアンボン市に比較的近く豊かであったためムスリム地区との経済的格差も原因だっただろう。これによって大学が崩壊したのだというのがキリスト教徒側の分析です。

一方攻めたムスリム側に聞くと、この辺の村に攻めていった特に紛争リーダーといわれる人たちに会ってきたのですが、大学がキリスト教徒に独占されていたのは、植民地時代からのなごりでもなんでもなく、単にこのパティムラ大学にムスリムの人たちが行きたくなかったからだといいます。なぜパティムラ大学が嫌なのか。卒業生に話を聞くと、パティムラ大学はムスリム差別がひどく、先生のほとんどがキリスト教徒であるこの大学では、お金を渡したりなどして先生とお近づきにならなければ卒業できなかったといいます。だから、多くのムスリムは高校を卒業するとアンボンではなく、マサツカルやスラバヤ、ジャカルタの大学に進学するようになったのだといいます。つまり外に子供を出せるだけの経済力もあることになります。紛争当時、大学の破壊に参加したムスリムの人たちの話では、この大学を卒業した人々は泣きながら恨みの言葉を発して大学を焼いていたということです。ひどい差別があったということを表しています。

このように攻撃された側と攻撃した側の解釈は大きく異なることがわかります。つまり、キリスト教徒だけに話を聞いて紛争分析を行い開発の政策を立てると大変な温度差が生じ、根本問題に触れることなく紛争の火種をまた増やすことになりかねないということがわかつています。このように平和構築と開発のモデルを作っている先進国といわれる国々は、さらに地域の声に敏感になる必要性を感じます。

また、宗教紛争後の地域の場合、キリスト教徒とムスリムを同時に集めて話を聞いても本心は聞き出せません。それぞれが不信感をいまだ根強く持っているため、本当のことは話さないからです。それぞれと信頼関係を築いた上でやっと聞き出せる本音があります。この場合、一方の宗教に属していると本音を聞き出すのは、特に西洋人の場合ムスリム側から本音を聞き出すのは至難の業です。ここに日本の役割が、特に宗教紛争後

の平和構築と開発にあるのではないかと思っています。宗教を持たないと思われている日本人だからこそ、人々の本心を聞き出すことができるのではないか。先ほど述べたように、日本人に欠けている点を見直した上で接すれば、真の平和構築に向けての対策を共に作っていくことができるのではないのでしょうか。そのためには地域に根づいた調査が不可欠であることはいうまでもありません。日本が現時点ではまったくその役割を効果的に果たしていないのが残念です。

こちらのほうで憲法第9条の議論がありました。ピースメーカー（peace making）、ピースキーピング（peace keeping）、ピースビルディング（peace building）の段階で、軍隊の介入ですとピースメーカー（peace making）とピースキーピング（peace keeping）にあたると思いますが、日本は状況が落ち着いたピースビルディング（peace building）の段階に紛争予防を含めた復興開発を専門的にやっていくことで、そして特に日本の役割が大きい「宗教紛争後」の平和構築をやっていくことで活躍が期待されると思っています。

アンボンの例を取り上げて幾つかのポイントを挙げてみましたが、世界中で起きている宗教紛争と似通った点が数多くみられます。この調査がマルクの平和構築、そして他の宗教紛争の平和構築に少しでも役に立てればいいと思っています。

ありがとうございました。

——堀場氏 講演 終了